

デューラー 《1500年の自画像》

前川 誠郎

1988年4月21日、ミュンヘンのアルテ・ピナコテークでは所蔵する12点のデューラー画のうち、《嘆きの聖母》、《パウムガルトナー祭壇画》、《グリーム家の哀哭図》の3点5面に酸が掛けられ、各画ともに大きな損傷を蒙った。以来今年に至る丁度10年の間に近代技術の粋を尽した修復作業が進められて、今春4月から6月までその成果を一般に公開する展覧が開かれた。私は幸いにも6月9、10日と二日に亘って会場のノイエ・ピナコテークを訪れ、それらの蘇生した名画との再会を果たすことができた。1957年に初めてミュンヘンへ行って一年間をそこで過ごしてからまさに40年が経っている。修復された絵はどれも昔日の姿とすこしも変りはないように見えるが、知る人にとっては何とも傷ましい出来ごとであったに違いない。デューラー自身は絵の生命は500乃至600年と考えていた節があり⁽¹⁾、被災画が何れも制作後およそ500年経ったものであるのは、突発の災害とは言え、不思議な暗合を想わせる。

この展覧では被災した絵のみに留らず、バイエルン州立絵画コレクションが所管するすべてのデューラー画が展示された。即ちアルテ・ピナコテークからは《オスヴォルト・クレルの肖像》、《1500年の自画像》、《ヤーバツハ祭壇翼画(2点)》、《若い男の肖像》、《カーネーションの聖母子》、《ルクレツィアの自刃》、そして《4人の使徒》が、またニュルンベルクのドイツ民族博物館からは《スティムファーロスの怪鳥を退治するヘラクレス》、《ホルツシューアー一家の哀哭図》および《ミヒヤエル・ヴォールゲムートの肖像》、さらにアウグスブルクの国立ギャラリーから《ヤーコプ・フッガーの肖像》が出ていた。併せてバイエルン州立版画館所蔵の50点のデューラー版画も別室で展覧されていたから、まさに空前のデューラー・オン・ノパレード展であったと言ってよい。

10年に及ぶ修復作業の成果報告を主目的とする展覧会であることから当然とも言えるが、被災画以外の作品にも現在の保存科学技術を駆使した調査が行われ、その結果がカタログ⁽²⁾に詳しく記載されている。殊に興味深いのは赤外線撮影で得られたフィルムにデジタル処理を行って表面の絵具層を消去し、驚くべく鮮明な下絵が得られたことである。その結果絵によってデューラーの下絵の描き方に大きな相違が見られることが明かとなった。ここで下絵というのは素地に施した画板上に筆をもって描いた原寸大の図様のことで、着彩後は絵具の下に隠れて見えなくなる。例えば《4人の使徒》では聖人たちの顔貌は目鼻立ちの輪郭と頭髪や髯を示すに留り、陰影線(ハッチング)は左右両幅ともうしろに立つペテロとマルコにやや細かな筆遣いが見られるのを除くと、ヨハネとパウロでは極めて簡略である(図1)。

これに対し人々を驚かせたのは《1500年の自画像》の下絵素描(図2)の精密さであった。それは当然のことながら皮膚の露出した顔面と右手において認められる(図3参照)。画家は画板と並べて置かれた鏡に



図1 ヨハネの顔の下図
《4人の使徒》左幅部分



図2 デューラーの顔の下図
《1500年の自画像》部分



図3 《1500年の自画像》
アルテ・ピナコテーク



図4 《1484年の銀筆自画像》
アルベルティーナ版画素描館



図5 《1493年の自画像》
ルーヴル美術館



図6 《1498年の自画像》
プラド美術館

写るわが姿を細筆をもって丹念に写したのである。胸許を軽く押さえる右手が実は左手であるのは鏡像の定石であって、この手法をデューラーはすでに《1484年の銀筆自画像》(アルベルティーナ版画素描館 図4)で使い、その後1493年(ルーヴル美術館 図5)や1498年(プラド美術館 図6)の自画像では右手にさらに左手をも添えた形を描いている。今般の自画像下絵の発見を契機として何れはルーヴルでもプラドでも赤外線撮影による下絵の調査が行われることが期待される。

デューラーが自身の画法について述べたものとしては、1507-09年にフランクフルトの織物業者ヤーコブ・ヘラーへ宛てて書き送った9通の書簡の中で、ヘラーから依頼されて制作中の祭壇画に関し

「[画板を]指物師から受け取り……地塗り職人へ廻し、彼はそれに白下地を引き、着色する……」

「[中央図を]長時間かけて構図し、下描きを始められるよう二種の極上の絵具で下塗りして……」

「澄明さと長持ちとのために、およそ4、5回または6回下塗りし、最上のウルトラマリンを使って描く……」

などと述べているのが具体的である⁽³⁾。

《1500年の自画像》の画板は、厚さ5-6ミリの菩提樹板を3枚縦に接合したもので、そこに表裏とも白チヨークで地塗りしてある。寸法は高さが67.1-66.9cm、幅が48.7-48.9cmである。上記のヘラー書簡中に言う「長時間かけて構図する」とは何段階にも亘ってなされた紙上のデッサン(習作素描)を意味し、デューラー素描にはこの種のものが多いが、《1500年の自画像》のための紙上素描は皆無である。しかしそれは失われたというよりもむしろ作る必要がなかったことを今回発見の下絵は語っていると思っただけであろう。つまり画家は鏡像を見ながら下地を施した画板の上に直かにデッサンを行いその仕上がりをまっけて着彩したのである。従ってデッサンは見えなくなったが、絵が永らえる限りは絵具層に覆われていつまでも完全に保存されることになった。それがこの度進歩した光学技術のお蔭で再び姿を現したのである。

《1500年の自画像》は幸いにして被災を免れたが、しかし今世紀初頭の1905年の春にはナイフで切り付けられる事故に会い、その時の傷が左(向かって右)目の下瞼に残っている。デューラー画は観る者に強いインパクトを与え、それが時に人を狂気へと誘うのである。

この絵の最大の特色は画家の顔貌に明かに認められるキリストとの相似性である。しかしこれが紛れもない自画像であることは顔の右横に書かれた銘文"Albertus Durerus Noricus/ ipsum me proprijs sic effin=/ gebam coloribus aetatis/ anno XXVIII."(ニュルンベルクのアルブレヒト・デューラー、我れ自らを二十八歳の年に不朽の色彩をもってかく描けり)が証するところである。28歳の年とは即ち顔の左横のモノ

グラムの上に記された1500年であり、1471年5月21日生れの画家が、15世紀最後の年の誕生日以前に描いたことを意味している。それにも拘らずこの肖像がキリストに似ていることは否定し難い。

キリストの容貌の図像表現には古来大別して二種あり、初期キリスト教時代にはアポロ型と呼ばれる無髯丸顔の若者の姿、そしてビザンチン美術では有髯で面長の哲学者型が用いられ、ロマネスク期以後は西洋世界でも後者の哲学者タイプが優位を占め定形となって行った。それに伴ってキリストの顔貌に関する儀軌とも言うべきものも作られることになる。キリストを処刑したユダヤ総督ピラト(ピラトゥス・ポンティウス)へ宛ててその前任者(プブリウス・レントゥルスという名であったとされる)が送った手紙(いわゆるレントゥルス書簡)は13世紀に作られた偽書であるが、デューラーの当時には信憑すべき文献とされ、1491年ニュルンベルクで刊行された版本もあるという。そこにはレントゥルスの治世にユダヤ人の耳目を奪った人物としてのイエス・キリストの容貌が記述されており、瘦身で端正な顔貌は人に親愛と畏敬の念を起こさせ、頭髪は早熟の堅果色で耳までは真直ぐであるが、それから先は捲毛となって色も濃さを増し、真中で二つに分かれて両肩に垂れている。額は広く滑らかで皺も染みもなく軽く赤味掛かっている。鼻と口とはよく整い顎髯は頭髪と同色で、濃いのが短く、また中央で左右に割れている。眼は緑または白味掛った青色で澄んでいる云々とある由⁽⁴⁾。ヤン・ファン・アイクに原画が帰される《キリストの真影(いわゆるウエラ・アイコン)》(図7)はこの記述に従ったものとされ、各地でコピーが知られるが、デューラーの《1500年の自画像》の形式もまたそれに拠っていることは疑いない。これを要するにデューラーは自身をキリストに見立てたのであった。

その理由は今ここに問うところではない。彼がこのような挙に出るには一つの不可避な前提があった筈である。即ち自己の顔貌のキリストとの相似の自覚である。それなくしてかような見立ては成立し得ない。しかしこのことに関する彼自らの証言は彼の遺文中には見出されず、また第三者に依るものとして『人体均衡論四書』のラテン語版(1532年)の訳者ヨアヒム・カメリウスの「自然は彼(デューラー)に容姿端麗にして、また彼の懐く精神にふさわしい姿態を与えた……彼の容貌は表情豊かであり、双の眼は輝き、鼻は高貴でしかもギリシャ人がテトラゴノン(四角)と呼ぶもの(段鼻)であり、首はやや長く、胸は広く、緊まった身体、力強い双肩、そして両脚は頑丈であった。しかし彼の手の指よりも優美なものを見ることはできない云々」なる言葉も⁽⁵⁾、前記レントゥルス書簡を特に意識した叙述であるとは思えない。

そこで考うべきは素描も含めて10点近くも残る自画像の表現にその意識がどれほど認められるかである。私が旧著で述べているように⁽⁶⁾デューラーの自画像は画種としても飛び抜けて早く、モデルを特定できる西洋最古の作品であり、従って例えばレンブラントの自画像などとは内包される意味が違うと考う可きである。即ちルーヴルの絵(1493年)は求婚そして職人としての独立を、またプラド像(1498年)は大作《黙示録》あるいは《大判受難伝》の制作完成をそれぞれ契機として神に感謝を捧げる一種の奉納像(ヴォテーフビルト)であったかと思う。そしてプラドの自画像において初めてレントゥルスの記述乃至は《ウエラ・アイコン》の図像表現を明確に意識し、これを自身の姿に当て嵌めたのであった。5年前のルーヴル像と比較すれば頭髪や顎髯の形にそのことは瞭かである。《1500年の自画像》はプラド像の延長線上に位置する。これら2画とそれ以前のルーヴルの絵とははっきり一線を画すべきものである。しかしデューラーは自らをキリストに見立てたことによって1500年以後はもはや自画像を描けなくなるというジレンマに陥って下う。何故ならキリストの享年はおよそ30歳とされ、その齡以降のキリスト像は存在し得ないからである。これが《1500年像》以後に彼の



図7 ヤン・ファン・アイク原画
《ウエラ・アイコン》ベルリン、国立絵画館

自画像がない理由である。画中に副人物として自らの姿を描き込むなどのことはあっても独立作品としての自画像は全くない。僅かに2、3の素描が残るくらいのものである。

ところでデューラーは本当はどのような顔をした男であったのだろうか。第三者の手になるデューラーの肖像としては、ハンス・シュヴァルツおよびマッテス・ゲーベルがそれぞれ彫ったメダイヨン(図8、9)そしてエアハルト・シェーンの木版画(図10)とアンドレアス・シュトゥックの銅版画(図11)の計4点が知られるが、面白いのは



図8 ハンス・シュヴァルツ刻
《デューラーの肖像》(メダイヨン)



図10 エアハルト・シェーン刻
《デューラーの肖像》(木版画)



図12 《1491年ごろの自画像》(素描)
エルランゲン大学図書館



図9 マッテス・ゲーベル刻
《デューラーの肖像》(メダイヨン)



図11 アンドレアス・シュトゥック刻
《デューラーの肖像》(銅版画)



図13 《1493年の自画像》(素描)
メトロポリタン美術館

これら二枚の版画肖像がお互いに異なるのみならず、《1500年の自画像》を典型とする見立てキリスト像ともかなりの相違を示している点である。シュトゥック版画の原図は1521年5月アントウェルペン滞在中のデューラーをトマソ・ヴァンチドール・ダ・ポローニャが描いた絵(亡失)であり、長髪に着帽の4分の3正面像であるが、他方項で髪を切ったプロフィールの人物を示すシェーンの木版画の原画については詳細は分らない。しかし両者とも顔はどちらかと言えば短かく、キリスト像のように長くはない。デューラー歿後1世紀以上も経った1629年のシュトゥック像はともかくも、シェーン(1542年歿)はデューラーと同時代に、しかも同じニュルンベルクで活動した版画家としてデューラーその人を熟知していた筈であるのに、その彼の眼に影じたデューラーの顔貌が巨匠自身の手になるものと違っているのは実に不思議である。殊にゲーベルのメダイヨンとともに断髪像である点の特異である。

デューラーは少年時代より肩まで下がる長髪にしていた。そのことはアルベルティーナやエルランゲンあるいはニューヨークのメトロポリタン美術館(レーマン収集)の自画像素描(図4、12、13)、そしてまた《1493年の自画像》(ルーヴル)等の、全く作為を感じさせない自然な描写が示す通りである。顔のかたちも長めの部類に入る。しかし多く残された彼の人物画(素描を含む)では男性は大抵が断髪であって彼のような長髪はむしろ異例に属する。彼の父や弟エンドレスにしても頭髪は長くて項までである。このことからすれば長髪は彼の個人的な好みであったと見てよい。従ってシェーンの断髪肖像には何らかの意図に基く作為が働いていたと考えてよいのではあるまいか。

それにしてもマドリッドやミュンヘンの自画像の顔容が甚だ作為的であることも間違いない。それらは自画像であってしかも見立て像である。そこには画家の強い希求が籠められている。そしてそれを解こうとする美術史からの試みもこれまですでに幾つとなくなされて来た⁽⁷⁾。私はこの度久し振りにミュンヘンを訪れて《1500年の自画像》と対面し懐旧の情に浸るとともに、改めて実に不思議な絵であると思った。あと2年も経たないうちにこの絵が描かれてから500年目がくる。西暦2000年は最後の審判のありうる年である。デューラーはその頃世界は終末を迎えると信じていた。私たちはまさにその時点へ近付いている。千載一遇とは中国の古語であるが、キリスト教的思考に立てば今ほどこの言葉の意味を考えさせられるときはない。

註

- (1) ヤーコブ・ヘラー宛書簡第8信(1509年8月26日)。また拙著“Blick nach Westen”(Nürnberg, 1990) S. 14ff.
- (2) Albrecht Dürer, Die Gemälde der Alten Pinakothek (München, 1998)
- (3) ヘラー宛書簡第2信(1508年8月24日)
- (4) 上掲カタログ(註2) S. 325f. レントカス書簡のことをこのカタログによってはじめて知った。まだ原文を見ていないので今回はカタログの記事を祖述するに留めておく。
- (5) 拙著『デューラー 人と作品』(講談社、1990年刊) 7頁
- (6) 同上63頁
- (7) 下村耕史著『アルブレヒト・デューラーの芸術』(中央公論美術出版、1997年刊) 第13章「《一五〇〇年の自画像》」260-282頁